

御殿場市の地震防災対策をテーマにした授業
＝県立御殿場南高

高 南 御殿場 地震、火山の授業や課外活動 災害への行動力育成

県立御殿場南高（御殿場市新橋）では本年度、二〇〇七年度防災教育チャレンジプラン（内閣府

など後援）に基づき学習プログラムを実践している。地震、火山の知識を深める授業や、地域、行

二年文系地学選択者の約五十五人。

学習プログラムは、地震の基礎知識、大地震発生時の行動、地震防災マップ作成などの「地震分野」や火山噴火、富士山の地形と火山活動、富士山ハザードマップの「火山分野」のほか、「気象分野」も盛り込み、授業や学校行事、課外活動の中で進めていく。このほど行われた授業では、御殿場市防災対策室の職員を講師に迎え、市の地震防災対策を学んだ。

担当の美沢綾子教諭は「防災教育の取り組みが三年目を迎え、集大成としてチャレンジプランに応募した。今年は富士山宝永噴火三百年の年でもあり、学習したことを地域に発信していければ」と話した。

災害に対する行動力を育む

御南高で防災教育

講座やマップ作成など

【御殿場】御殿場市新橋の県立御殿場南高校は今年度、地学を選択している二年生五十六人を対象に防災教育を実施している。二十三日に行われた第二回目の授業では、御殿場市防災対策室の職員を講師に招き、同市が進める防災への取り組みなどを学習した。

学習成果を地域と共有

この防災教育は、内閣府や消防庁、文部科学省などが後援する防災教育チャレンジプランの指定を受け、「自然災害に対する行動力を持った高校生への育成」をめざすというもの。自然現象のメカニズムを理解し、防災に

対する認識を養うことで「人と自然との共生」「人と人との共生」の観念を持つ。さらに、学習成果を地域住民や行政、専門家と共有することで、地域全体の防災力を高めるねらいもある。同プランに指定を受けたのは全国

で十五団体。うち、静岡県内で選ばれたのは同校のみだ。

同校会議室で行われたこの日の授業には、御殿場市の鈴木正則防災監、防災対策室の平野昭弘防災調整官らが講師として招かれた。

このうち、平野調整官は同市の防災対策について説明。このなかで「東海地震、神奈川県西部地震の切迫性が高まるとともに、富士山噴火も少しずつですが現実味を帯びています。大規模災害は明日起きても不思議ではない状況なので、皆さんにも日頃の備えを欠かさないでもらいたい」と防災対策の重要性を説いた。また、震度も弱以上の地震が発生した際の同市の被害想定について言及。「行政の防災力には限界がある。阪神淡路大震災でも、最後にものを言った

たのは地域の防災力だった。災害が起きたとき、自分には何ができるのか、何をしなければならぬのかを常に頭に置き、万が一の際には進んで災害ボランティアに参加してほしい」と呼び掛けていた。生徒たちは平野調整官の説明を一言も聞き逃さず、まじと耳を傾け、その内容を熱心にメモしていた。また、質疑応答のコーナーでは、防災計画策定の経緯、といった質問が飛び出し、関心の高さを伺わせていた。

同校では今後、一年間を通じて地震発生メカニズムや火山噴火の特性、日頃からの防災対策などを通常の授業の中で学んでいくほか、図上訓練も実施する。また、地域住民との協働で地震防災マップを作成するほか、学習成果を十一月十六日の宝永噴火三百周年記念シンポジウムの中で発表することになっている。

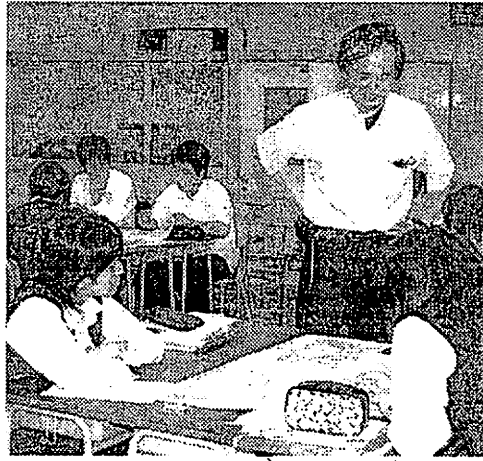


写真 御殿場南高校で行われた防災教育

南高2年生54人

富士山防災マップ学ぶ

御殿場南高校(桜井啓行校長、全校生徒668人)で27日午後、火山防災マップについての実習と講義が行われ、2年生54人が静岡大学教育学部小山真人教授



防災マップで実習する南高2年生ら

19.6.29 岳麓新聞

と村越真教授から富士山火山防災マップの読み方と富士山についての基礎知識を学んだ。富士山火山防災マップを使った実習が行われたのは県内の高校生では初めて。

生徒らは4人1組で富士山噴火の被害を想定した富士山火山防災マップを使い、気象庁が富士山噴火の火山情報として臨時情報を出した時や、噴火が始まった時に取るべき行動は何か、避難経路はどうするかについて話し合った。富士山火山防災マップでは火山被害の基礎知識、予測される災害の広がりや避難所などの位置、気象台から発表される火山情報の種類、異常時や普段の心構え、避難所の連絡先などを学んだ。

この防災教室は御殿場南高校の地学の授業で「自然災害に対する行動力を持った高校生の育成」をテーマに今年12月までに全40回開かれる。

富士山噴火想定し

避難計画作成など学ぶ

御南高

【御殿場】県立御殿場南高校の十九年度防災教育チャレンジプランはこのほど、御殿場市新橋の同校で行われ、生徒たちが富士山噴火を想定した避難計画の作成などに取り組んだ。

防災教育チャレンジプランは、内閣府や消防庁、文部科学省などの後援するもので、「自然災害に対する行動力を持った高校生の育成」をめざすというもの。同校は今年度の指定校で、地学を選択している二年生五十八人が一年間を通じて地震発生時のメカニズムや火山噴火の特性、日頃の防災対策などを学んでいく。

今回の授業は火山防災に関するカリキュラムの

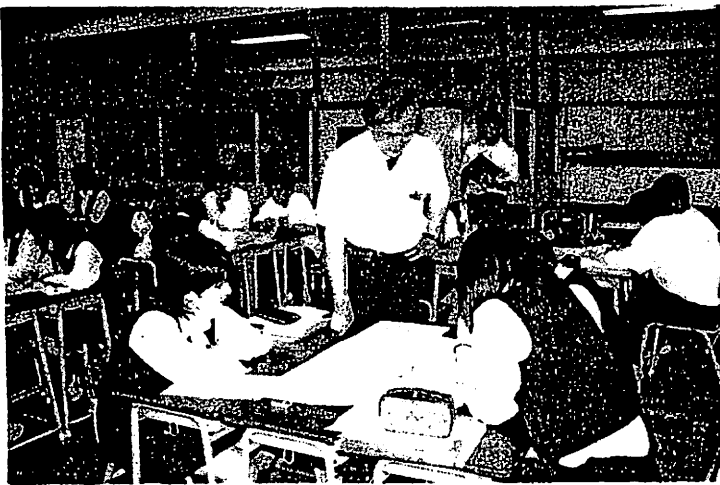
総仕上げで、静岡大学教育学部の小山真人、村越真の両氏を講師に迎え、「富士山ハザードマップと防災」について学習した。

生徒たちは、富士山噴火の被害想定を記したハザードマップの読み取り方について小山、村越両氏から指導を受けた。

氏から指南を受けるとともに、噴火の時期や時間帯、火口の位置など様々な情報を分析しながら、被害を最小限に食い止めるために、どういう行動を取るべきか、避難経路などを地図に書き込んでいった。

お布団打ち直し
綿 幸
☎八二〇二一四

19.6.29 日刊静岡



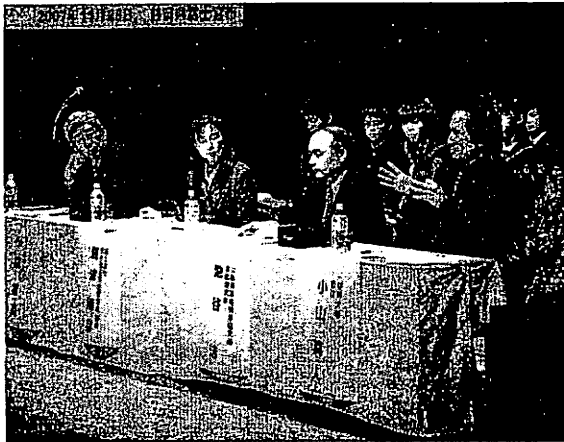
南高2年生 火山学習発表

国土交通省富士砂防事務所主催の「環富士山火山防災シンポジウム」が25日午後1時から富士宮市民文化会館小ホールで行われる。県立御殿場南高2年代表11人の生徒が地学教科で学習してきた富士山について①火山とその恵み②火山噴火と災害及び火山の性質③火山防災マップの読みとりの三分野で実践成果を発表する。

ハザードマップ活用して

環富士山防災シンポ 噴火に備え啓発

静岡、山梨両県の富士山ろく十六市町村で構成する環富士山火山防災連絡会と国土交通省富士砂防事務所は二十五日、富士宮市民文化会館で「環富士山火山防災シンポジウム」(静岡新聞社・静岡放送後援)を開いた。富士山の宝永噴火から三百年の節目を機に、噴火に備えた防災対策を再確認、啓発するのが狙い。両県の防災関係者ら約六百人が来場した。

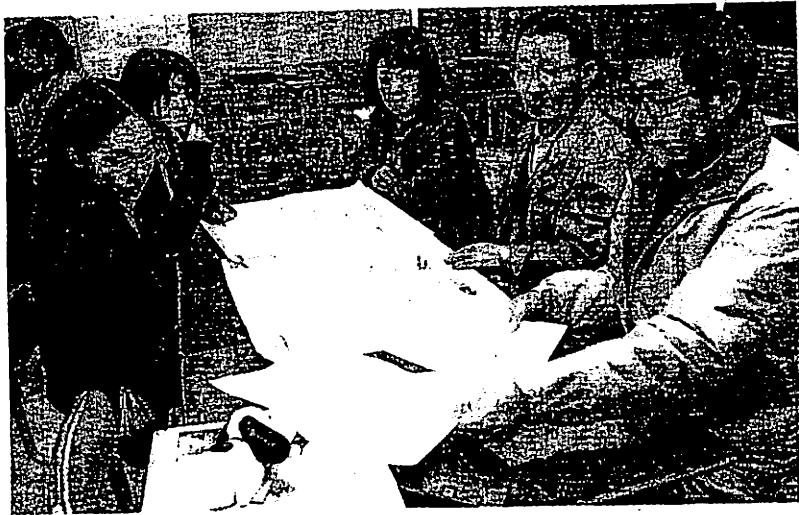


富士山ハザードマップの活用法などが議論されたシンポジウム＝富士宮市民文化会館

パネリストは静岡大教育学部部の小山真人教授と山梨県環境科学研究所の池谷浩客員研究員、富士宮市自然環境保全審議会委員の難波清芽委員、小室直義富士宮市長の四人。二〇〇〇年十月から翌年五月にかけて、富士山直下で約八百回発生した低周波地震を受けて作製された富士山ハザードマップについて活発な議論を交わした。

「マップの情報が読み取りにくい」とする市民の指摘に対し、小山教授は「分かりにくいのは、さまざまナリオが一枚に集約されているため。ナリオごとに具体的な検証をすれば効果は高まる」と強調。池谷客員研究員は「送り手と受け手が同じ土俵にいないと情報は伝わらない。行政には知らせる努力が求められる」と訴え、避難者の視点に立った山梨県側の「避難マップ」を紹介した。

ハザードマップの読み取りを行う生徒と地域住民
— 県立御殿場南高



富士山噴火 仕組み説明

御殿場南高 防災教育の成果公開

防災教育を実践している御殿場市の県立御殿場南高は、このほど、同校で公開講座「南高防災講座—火山編」を開いた。

生徒が火山の噴火や災害などについて学習の成果を発表し、参加した地域住民らとともに富士山ハザードマップを眺み取る実習に取り組んだ。

同校は二〇〇七年度防災教育チャレンジプラン（内閣府など後援）に選ばれ、二年生の地学選択者を対象に東海地震や富士山噴火、気象災害に関する授業、専門家の講義などを行っている。

公開講座では「火山とその恵み」「火山噴火と災害」「火山の性質」をテーマに富士山の生い立

ちや火山の種類、噴火の仕組みなどを説明。富士山ハザードマップの実習では小山真人静岡大教授の指導の下、噴火の被害を想定し、具体的な行動を確認した。

19. 12. 3 静岡新聞